

日本庭園から緑と農のまちづくりへ

文・漆原次郎

進士 五十八

しんじ いそや

1944年（昭和19年）4月8日生まれ。日本式庭園の空間や景観の特徴を、科学的に分析した。とくに、自然と共に生きる日本人の思想、日本の風土に合った農業技術を庭園づくりに活かすための技法、使うことと味わうこと（用と景）のバランス感覚などを明らかにした。いまはこうした成果を生かした「緑と農のまちづくり」の実践に取り組んでいる。



庭園は、池、小さな丘、木々などからなるみどり豊かな場所だ。人は、どのような心と技で庭園をつくってきたのだろう。進士五十八さんは、それを科学的に調べあげ、またその成果をいまの日本のまちづくりに活かしている。

みんなちがって、みんないい

進士さんは、京都の北西、船岡山公園の近くで生まれた。すぐ北には「禅の庭」で知られる大徳寺がある。だが、戦時中だったため、まもなく福井県、越前平野の水田地帯に疎開した。小学校時代は、桑の実を摘んだり、川遊びをしたり、また田んぼでタニシを採ったりした。「自然遊びと農村体験が、わたしの原風景になっています」。

夏休みには、母親につれられて京都のお寺にお墓参りをし、京都の名園にも遊んだ。

小学校高学年になると、東京に引っ越した。絵が好きで、江戸の雰囲気を残す深川の木場の風景を描き、絵画展に入賞した。中学では理科クラブに入り、化学の実験が好きになった。

中学を卒業すると、家の近くの東京都立化学工業高等学校で学んだ。そして卒業後、大手の化学会社の研究所に勤めた。給料はよかったが、実験で目をけがして入院したり、大きな組織で働くのがよいのかと悩んだりした。進士さんは「自分らしい生き方をしよう」と考え、こんどは東京農業大学農学部造園学科に入学した。「京都で見ていたような庭園ならば、個人の手でもつくれそう。絵も好きだし、美しい景色をつくるのは楽しそうだと考えました」。

いっぽうで、進士さんはその頃の東京の環境の悪さも気になっていた。「緑いっぱい福井とちがって、隅田川は墨を流したように汚れていて臭い。空も灰色。なんとかしたい」。

その思いを叶えてくれたのが「造園学」だった。英語では「ランドスケープ・アーキテクチャ (Landscape Architecture)」という。大地に広がる“風景”をつくる科学・技術だ。

東京農業大学の学生時代、進士さんは3人の恩師に出会った。

1人目は、江山正美先生。当時の日本の造園学は、古い伝統を受けつぐだけのものだった。江山先生は「いまの造園は絵空事。もっと科学的に都市のみどりや自然を守るための環境計画学をめざさなければいけない」と強く言った。進士さんは仕事で科学的な実験でものごとを証明することを当然のようになっていたため、「先生のおっしゃるとおり」と強く感じた。実験の対象として見られてこなかった日本庭園や公園に、科学の視点を向けようと決めた。

上原敬二先生からも教えを受けた。明治時代以降の日本の造園の新時代を築いた人物だ。東京の明治神宮の森が50年後、100年後、150年後にどう生長していくか予測図をつくり、まだ荒地だった場所に人の手で森をつくったのだ。95才で亡くなるまでに500冊以上の本をかきあげている。「樹木学、庭園学、都市計画と公園、風景論、国立公園と自然保護といった造園学にかかわるすべての分野の本を、それぞれ何十巻分もおかきになりました。『すべてはつながっている』『造園は雑学だ』とも話してくださいました」。

庭、都市、農村、国、そして地球を“つながっているもの”と捉え、そのすべてを研究してこそ「美しい国」の姿が見えてくる。進士さんはそう考えた。いま学問の世界でも、さまざまな分野どうしを結びつけ、一つのものとして捉える「学問の融合」の大切さがいわれている。上原先生が言っていた「造園は雑学だ」という言葉の本当の意味がここにあると進士さんは考える。いま学問が分野ごとに細かく分かれているなかで、自然、社会、そして人にかかわるあらゆる学問を結びつけるのが「ランドスケープの視点」だ。

3人目の恩師は大学の先輩、井下清先生だ。1905年（明治38年）、東京市（いまの東京都）の役人となり、井の頭公園や多磨墓地をはじめ、1923年（大正12年）の関東大震災後には震災復興公園を一気に52か所もつくった。井下先生は、「公園をつくり、育てる仕事は現実的対応が大切だ。だが一方で、いつも理想を忘れてはならない」と言っていた。「東京農業大学を創った榎本武揚とおなじように、井下先生も、社会に直接役立つことが一番と考える『実学主義』を基本にしていました」。

3人の恩師の影響を強く受け、進士さんは日本庭園の研究だけでなく、緑のまちづくり、農山村の活性化、自然の保護といった幅広い分野に関心をもち、研究するようになった。「私が暮らした場所の環境はいろいろ。恩師たちの考えもいろいろ。そんな経験から、多様性をふまえたまちづくりや、暮らし方、生き方を大切にしたいと思ってきました。美しいまちはこういう形、こういう色彩と1つにきめつけるのはよくない。地域や場所によってちがっていい。「みんなちがって、みんないい」のです」。

日本庭園を技術の視点で研究する

なぜ、私たちは庭をつくってきたのか。なぜ、西洋とちがって日本の庭園には、自然の石や木がよく使われてきたのか。

こうした問いに、以前の研究者は「仏教思想の影響が強かったから」などと答えてきた。それは歴史家の視点で、すでにある庭園を解釈するだけで、つくる側の視点で考えられたものではない。「庭園をつくるために土地をどのように理解し、空間や景観をどう工夫すればよいか」という技術の視点がほんとうは必要だ。

そこで進士さんは、日本の数々の庭園を技術の視点で詳しく分析していった。実際に調べたことは幅広い。その場所が作庭に適しているかといった「立地」のこと、山か坂か谷かといった「地形」のこと、どんな植物が生えている場所かの「植生」のこと、敷地がどの方角に向いているかといった「方位」のこと、水をどう引いてくれるかの「水利」のこと、どのくらい広いかといった「面積」のこと、なんのために使われるかといった「利用目的」のことなどだ。



京都の桂離宮にて。左が東京農業大学の学生時代の進士さん。友人とともに。

さらに、自然の風景をまね、庭園に縮小してつくる「縮景」のこと、遠くの山などの風景を庭園の景色に取り入れる「借景」のこと、草木の植え方や手入れを示す「樹芸」のこと、時が経つことによる庭園の変わりように美しさを感じる「時間美」のことなども調べた。

進士さんの調査分析は図面からひろった要素の数値によった点に特徴があった。それまでの庭園研究にはなかった方法だ。庭園がどんな形をしているかといった「構図」、景色対象への目線の角度はどうかといった「仰角」、逆に高いところから見下ろした池への角度はどうかといった「俯角」、どこまで前のほうを見通せるかといった「視距」、園路の曲がり具合といった「曲率」、庭園面積全体に対して池や流れがどのくらいを占めるかといった「池泉面積比」、水際の線がどのくらい入り組んでいるかといった「汀線複雑度」などを数値化して調べたのだ。

「数値で科学的に分析することで、庭園ごとの特徴が見えてきました」と進士さんは話す。

たとえば、枯山水の庭園でも、なにを示そうとしているかにより、石の数がちがってくる。京都の大仙院庭園のような、自然の風景をそのまま写そうとした写実式の作庭では、1坪（約3.3平方メートル）あたり石の数は3.4個。だが、おなじ京都の退蔵院庭園のような、自然の大切な雰囲気だけを表そうとした写意式の作庭では、1坪あたり1.5個と少ない。さらに、京都で有名な龍安寺石庭のように、自然心に訴える形をめざした象徴式の作庭では、1坪あたり0.1個ととても少なくなる。「たくさん材料を使えばいいわけではないのです。」



進士さんの庭園研究の原点、山口県防府市の「月の桂の庭」。石と砂だけで小宇宙風景を表現する枯山水。石の上に石を重ねるめずらしい石組が創出されたのは、地元の花崗岩地質風景の写景によったと分析。

庭園の広さと、庭園の路の曲がり方に関係性があることもわかった。広い庭園の路はゆったりカーブするが、狭い庭園の路は複雑にカーブする。狭い庭園では池の水辺が描く線も複雑になる。「でも、外の風景をとり込んだ借景式の庭園では、実際の面積より広く感じられるため、路の曲がり方はゆったりめになっているのです」。

進士さんは、日本のすべての庭園に共通する根本原理を、つぎのようにまとめあげた。

- ① 圍繞：ひとはまず居場所を堀、垣、屋敷林、山並みで囲む。それによって安全・安心の空間を得る。
- ② 縮景：囲みで守られた安心感のある空間と水があり
生き物が生きられる景観を基盤として、富士山や近江八景など美しい理想の風景を園内に縮尺して造

園する。

- ③ 借景：庭園が囲まれすぎると息苦しい霧囲気になるので、園外の山や塔や湖の風景を、庭の眺めとしてとり込んで、内と外が一体となった奥行きと広がりのある景観をつくる。
- ④ 樹芸：季節感のない建てもの中心の生活を補って、生きた自然、花やみどり、青空と鳥や魚、果樹などの生きものひとりが共存する空間や四季を感じる植栽景観をつくる。
- ⑤ 然び・時間美：庭園の美をつきつめると、時が経つことでの美にたどりつく。樹木は大きくなると根が張り地面より盛り上がる。庭石は苔むし、石の灯籠の笠は欠け、永い時が経ったことを感じさせる。時が経つことで、生き物は生長し石は風化するなどほんとうの姿を現す。自然に戻り、自然そっくりになる。これが日本美の特徴「わび・さび」の「然び」、「エイジング (aging) の美」である。こうして日本人は「時間の意味」を味わう。
- ⑥ 自然材料と農業技術：日本人は、動植物はもとより生きもの以外の石にまで魂があると感じる感性を持ち続けた。日本庭園は、自然の石、木、水を敬う心が基本に作庭される。自然を敬い、自然と共に生きる日本人の自然への態度と、稲作のために発達した棚田の石積みや盛切土など農地づくりの技術、そして水田のための溜池や用水路など水や土を扱う土木技術が、美しい日本庭園の基盤を支えてきた。

「緑と農のまちづくり」を国土に広める

進士さんは「緑で美を創る日本の作庭技術は、より大きな規模のまちづくりや国づくりにも応用すべきだ」と考えた。「人工的なもので膨れあがった非人間的な現代都市では、『緑と農のまちづくり』が絶対に必要です」。

ひとがおおぜい住む都会ではどれだけの自然の面積が必要か、を進士さんは研究した。その結果が「住環境におけるグリーンミニマム」で、「300M四方を単位として、自然面率 50%が必要」というもので、自然面には農地も含む。進士さんは、こうして水循環や農のある緑豊かな「緑の地域計画」や美しい景観づくりを、多くの都市でおこなってきた。

埼玉県の三芳町と所沢市にまたがった三富新田という地域がある。柳沢吉保という大名が江戸時代、川越藩（いまの埼玉県の西部）をおさめていたとき開いたものだ。風を防ぐのにも役立つクヌギやコナラの雑木林、農地、そして屋敷林に囲まれた家がある。この三つ一組の土地「5町歩」（約5万平方メートル）が一戸一戸の農家に割り当てられた。雑木林の落ち葉を肥やしにして、人びとは何百年にもわたり「川越いも」などをつくりつづけてきた。「ものを循環させて営む農業を学べる場所が三富新田です。都会でも自然とともに生きる価値を多くの人たちに理解してもらいたい」。

進士さんはまた第二の故郷、福井県にも通う。里山、里海湖といった、人との関わりの深い自然の土地を再生するためだ。

「私は庭園の“用と景”に多くを学びました。安全で便利であること、美しいこと、水が循環して



三富新田。高速道路開通で都市化するなか、雑木林と屋敷林のみどりの帯が残る。進士さんは、「世界農業遺産」登録を目指す。写真は東京新聞提供。

生きものが生きられること、社会の求めに^お応じられること、地域らしさがあり故郷を感じられることなどです。この原則^{げんそく}に根ざしたまちづくりをこれからもすすめていきたいと思ひます」。